

暗黒年代記 魔に支配された世界の物語 壺

……人の世が唐突に終わりを迎えたのはグレゴリア暦九九九年のことである。この年の二月、西の「異邦境」と唯一国境を接しているラトビリア帝国で帝位継承を巡る内乱が勃発した。皇帝フレアゴス三世の突然の崩御と、第一皇位継承者であったベトラ皇子の急死によって、元々不仲であった第二皇位継承者のユルバ皇子と、その叔父にあたる第三皇位継承者のレストレ大公が衝突したのだ。当初は議論の場での舌戦に収まっていたが、やがて熱を帯び始め、ついに互いに軍を率いて衝突するにいたったのである。まだ皇帝と第一皇子の国葬も執り行われていない二月二三日のことである。

ユルバ皇子を支持する軍は総勢一八万、レストレ大公を支持する軍は総勢二〇万。西の異邦境の警備にあたる二万を除いたほぼ全てのラトビリア軍がこの内戦に投入され、戦いは帝国各地で展開された。

ゾス平原の戦いでは両軍合わせて二万の兵が戦死し、ミリア湖海戦では一万人の兵が水中に没して湖は血の海と化し、ゾスマ要塞の戦いでは最終的に七万五千の死傷者が出た。そして四月一日におこなわれた、いわゆる「ダリアの最終決戦」では、三日三晩の激闘の末、二〇万人の戦死者がでた。勝者はレストレ大公であったが、彼はユルバ皇子の首を自らの手で刎ねた翌日、高熱を発し、一昼夜苦悶した挙句、なんと血を吐いて狂死してしまった。かくして、帝国を二分した内戦は終焉の運びとなったわけだが、まさかこの戦いが、そのまま人間世界の終わりに直結することになろうとは、この時はまだ誰も想像すらしていなかった。

短くも、激しい内戦の末、漁夫の利という形でラトビリア帝国の新皇帝となったのは、第四皇位継承者のミルカナ皇子であった。御年五歳。ベトラ皇子の忘れ形見であったこの幼児は、帝国の歴史上、もつとも悲惨な最期を遂げることになる。

新皇帝即位の儀がおこなわれたのは四月二八日のことである。この日、帝

都が祝賀の雰囲気に包まれるなか、西方の国境から凶報がもたらされた。なんと、二〇万を越す異邦境の邪悪な住民たちが、突如として国境を突破し、ラトビリア帝国へと攻め込んできたというのである。国境警備隊は全滅し、すでに一〇〇を越す村や町が攻め滅ぼされたとの報せも同時にもたらされた。

ラトビリア帝国は大混乱に陥った。先の内戦で帝国国内はボロボロに疲弊しており、軍も壊滅状態にある。それでも、宰相ゼルタクス指揮の下、侵入してきた邪悪な軍勢を迎え討つために、討伐軍が急遽編成され、一五万の軍が戦場へと赴いた。彼らは戦場にて、オーガやオーク、ゴブリンやコボルト、リザードマンやケンタウルス、さらには巨人やドラゴンの大群と激突し、完膚なきまでの敗北を喫して全滅してしまった。命からがら戦場を脱することができたラトビリア兵の数は百人に満たず、ゴヤの平原は人間たちの死体で埋め尽くされた。

これ以後、ラトビリア帝国は異邦境の邪悪な軍勢によって成すがままとなる。村や町は焼かれ、都市は攻め滅ぼされ、抵抗する者は容赦なく虐殺され、捕虜となった者は家畜以下の存在に蹴落とされた。若い男は鞭を打たれて牛馬の代用品とされ、若い女は異種族の旺盛な性欲を満たす玩具として扱われた。そして、そうでない者は、生きたまま彼らの食料とされた。そして五月の終わりには帝都も陥落し、ラトビリアの新皇帝ミルカナ一世は捕虜となった。

彼の最後は悲惨のひと言に尽きる。まだ五歳だというのに、目を抉られ、四肢を切断され、泣き叫ぶ口に鋭く尖った杭を打ち込まれて、それでもなおも絶命させてもらえないそのままの状態を外に晒されて、ゆっくりと、時間をかけて殺された。

この間、母親のニマは、一〇〇体のオーガたちに囲まれて、全員を満足させることができればミルカナを助けてやると言われていた。彼女は息子を助けるため、人間の足よりも太い巨根を股に挿入し、必死になって腰を振ったが、五本目のペ〇スを挿入した直後、子宮が破れてしまい、血を吐いて絶命

してしまった。その様子を目撃したオーガたちは、腹を抱えて爆笑し、ニマの腹を引き裂いてその内臓を喰らったのであった。

六月七日、ラトビリア帝国は最後の抵抗の拠点ハンダルマン城塞を失い、正式に滅亡した。それまでの間、ラトビリアと国境を接する各国では、ラトビリアに軍を送るべきか否かという議論がおこなわれていた。

ラトビリア帝国は、人間世界の守護者として、長年に渡って異邦境の邪悪な住民たちと戦ってきた。そのため、帝国は、これまで数多くの異邦境の住民たちを殺しており、今回の侵攻はその恨みによるものだと思われた。

「もし、事がラトビリア一国の犠牲で済むならばよし。だが、異邦境の邪悪な軍勢が他の国に攻めてくるながら、その時は各国が連合して立ち向かえばいい」

という楽観的な結論に各国は達したが、それはあまりにも甘すぎる見通しという他なかった。

人間世界へと侵攻してきた異邦境の邪悪な軍勢は、ラトビリア帝国を殲滅させると、次は隣国のヨルム王国への侵攻を開始した。仰天したヨルム王国は、すぐさま各国に援軍の派遣を求めたが、その間に滅ぼされてしまい、国王のナチュル三世は、ドラゴンによつて上空高くまで連れ去られた挙句、放り投げられて激突死を遂げた。

人間たちは驚愕したが、異邦境の邪悪な軍勢は、完全に意思の統一が成されていた。オーガ、オーク、ゴブリン、コボルト、ケンタウルス、リザードマン、巨人、ドラゴンという、まったく異なる種族・生物が、ひとつにまとまって群れを成し、人間たちを殺しにかかってくるのだ。それは、本当に信じられない光景であった。

「何モノかが奴らに知恵をつけているのではないか！」

そう考える者もいたが、確かめる術はなかった。しかし、そう考えるしかないほど、異邦境の邪悪な軍勢はひとつにまとまっていたのである。

異邦境の邪悪な軍勢は、戦力の分散という愚を犯さなかった。まとまって、ひとつの国をひとつずつ、各個に攻め滅ぼすという戦術を取り、国をひとつ

ずつ丁寧に滅ぼしていった。

ヨルム王国が滅亡後、シュハ王国、インスタニア王国、オルトバ騎士団領国、バレリア大公国、ユマ都市国家連合が滅ぼされ、ついには東の大国ゼリカ帝国も滅ぼされた。滅ぼされた国はどこもかしこも地獄と化し、使える人間には畜生としての役割が与えられ、使えない人間は生きた食料とされた。異邦境の邪悪な軍勢が補給を必要としなかった理由がこれである。人間を喰らう彼らは、人間がいる限り、飢える心配なく戦い続けることができたため、存分に力を奮うことができた。そして、旺盛な繁殖力を持つ彼らは、捕らえた人間の女たちを「産む機械」として活用することによって、戦力を増やす手段も整えつつあった。

ゼリカ帝国の滅亡後、人間世界の最後の砦となったのは、ユーフェリカ聖王国であった。神が降臨された地に建国されたという伝説を持つこの国に、多くの避難民が逃げ込んできた。その数は数百万人に昇り、ユーフェリカ聖王国の人口は一気に倍に膨れあがった。

ユーフェリカ聖王国は大混乱に陥った。食料の不足、物資の枯渇、犯罪の多発という三重苦に襲われたユーフェリカは、侵攻してくる異邦境の邪悪な軍勢との戦いを前にして、内部から自滅しそうな有り様を醸しだしていた。しかし、それでも、避難してくる難民たちに国の門戸を解放し続けた理由は、弱者救済がユーフェリカ聖王国の国是だったからである。

ユーフェリカの聖王リヒト四世は、天に向かって祈りを捧げた。

「神よ、どうか哀れな我らをお救いください。邪悪な魔の勢力を討ち滅ぼして、この世界を救済してください……」

しかし、彼の祈りが報われることはなかった。

冬の到来を訪れる北風が吹いた一〇月一〇日、人間世界最後の砦であるユーフェリカ聖王国に異邦境の邪悪な軍勢が総攻撃を開始した。ユーフェリカ聖王国は、聖王リヒト四世を筆頭に、正規兵・志願兵・それに殉教者で構成された八〇万の大軍で戦いに望んだが、敵軍の戦略の前に敗れ去ってしまった。異邦境の邪悪なる軍勢は、なんと、劣勢と見せかけて退却を続け、勢い

にのったユーフェリカ軍を戦場深くまで引きずり込むと、四方から火を放って退路を断ち、反転して大攻勢に討って出たのである。後方を火の壁によって囲まれたユーフェリカ軍は、大混乱に陥り、前方からの激しい攻撃に耐えることができず、全滅を余儀なくされた。

この戦いの最中、リヒト四世は自殺している。ユーフェリカでは、宗教上の理由から自殺が堅く禁じられているにも関わらず、彼は自分の剣で喉を裂いたのだ。自殺の理由は、彼が敵の「指導者」と激突し、この戦いの「真実」を知ったからであった。

「神は我らを見捨てられた！」

それが戦場に響いたリヒト四世の最後の言葉であったという。

この戦いでユーフェリカの組織的な抵抗は幕を下ろし、五日後には聖都も陥落。聖都攻防戦では、老若男女合わせて七〇〇万人が虐殺されて、人間世界から「国」という存在が消滅した。

それでも、生き残った人間たちは、各地で異邦境の邪悪な軍勢に対する抵抗活動が続けていたが、それは散発的なもので、もはや戦局が覆る気配はなかった。

こうして、人間世界は滅亡し、邪悪な者たちによる支配が到来を告げた。後世の歴史家は、この時代のことを「暗黒時代」と呼ぶことになる。

続きは本編にて